体系別特徴

ライフステージ別

特徴

こども大綱と同様の体系方法。『誰に』パターン1。

メリット

- ・ こども大綱も重要事項をライフステージ別で整理しているため国⇔国立市の比較がしやすい。
- ・ 子どもを含めて市民が、自分がどのような施策の対象になっているか判別しやすい。

デメリット

- ・ 権利条例と同時策定としては見せ方に必然性が薄い。
- ・ ライフステージ別に施策を積み上げる見せ方になるので、施策の過不足の可視化には不向きか。

施策ターゲット別

特徴

子どもの権利条例のそれぞれの役割別に、では市がどのような支援をするのかという、対比構造。『誰に』パターン2。

メリット

- ・ 現行計画を踏襲する形になるため新旧比較がしやすい。また、子どもの権利条例と一定の接続性がある。
- ・ 支援の方向性と子どもにどう波及させたいかの狙いごとの体系となるので、子どもに対しての家庭の役割や、子どもに対して地域の役割など、分かりやすい。

デメリット

- ・ 権利条例と同時制定としては見せ方に必然性が薄い。
- ・ 依然として施策の重複化の解消には不向きな見せ方か。

権利カテゴライズ別

特徴

子どもの権利をバイオサイコソーシャルモデルのどの要素が含まれているか仮置き。そのうえで施策がどのような権利を保障しているかの分析からパターン化を行って、近い形をグループ化したもの。

あとからグループ化した形にグループ名を付与している。

メリット

- ・ 現行施策がどの権利を保障しているかを切り口として分析、カテゴライズしているため、

資料 No.2-1

権利条例との連続性が強い。

デメリット

- ・ 体系の傾向が分かりにくい。
- ・ 施策の権利の保障状況など極めて主観的な分析に基づくため、コンセンサスが得にくい。
- ・